

時評



弁護士
吉田恒俊

今年^今は戦後80年、私は、1945年3月の大阪大空襲の時には3歳だった。母は私をおんぶして逃げまどったという。子どもの頃、天から真逆さまに落ちる夢で飛び起きたことが何度もあったが、母の背中で怖い思いをしたからだと思う。

同年6月7日、3回目の空襲で自宅は丸焼けになった。その時特定郵便局長であった大正3年生まれの父は、家族や事務員を疎開させ、公務上一人で天満の自宅兼郵便局にいた。B29の編隊が次々と襲来した時、父は自宅が焼夷弾で丸焼けになるのを見ていたが、自分の家が焼けているのになぜかホッとしたという。近隣が焼け出されていたので肩身が狭かったというが、正気ではなかったのだろう。

今、集団的自衛権の行使容認、殺傷能力のある武器の輸出容認、沖縄諸島における基地の拡大、学術会議の法人化案、防衛費の急激な増額など、平和憲法の下で雪崩を打つように危険な方向に向かっている。今こそ日本とアジアの国々に大惨害をもたらした先の大戦の戦争責任の検討が必要なきではなかろうか。検討の対象は先の大戦に止めるのではなく、その要因を明治以

今こそ戦争責任の追及を！ 分析は明治時代から

来の天皇制と軍国主義にまで広げなければならない。

日本近代史のすぐれた学者であった奈良女子大学名誉教授の中塚明先生を偲んで、去る3月、「先生の研究に学び語りあう会」が開催された。私は平和運動でも長くご一緒してご指導を受けた。先生は学問を実践に生かす学者であった。会には全国から百名を越える出席があり、沢山の熱いスピーチがあった。先生の業績の一つは日清戦争の公式戦史が偽造されたことを暴露したことがある（「歴史の偽造をたどす一戦史から消された日本軍の『朝鮮王宮占領』」高文研）。1894年の日清戦争の端緒となった日本の朝鮮王宮占領と国王を擒にしたことは偶然のものではなく、周到な計画に基づいてなされたことが明らかになった。

そのことが公になると内外から侵略だと非難されるので、時の政府は厳しい報道管制を敷いた。そして王宮占領は偶発的な衝突からはじまり、日本軍はやむなく応戦して王宮に入って国王を保護した小規模な衝突事件であったと、まったく偽りの発表をした。陸軍参謀本部はいったん出来上がった戦史草案を廃棄し、王宮占領部分を意図的に書き換えた。偽造された戦史は今も防衛研究所図書館で公式戦史として閲覧に供されている（廃棄された戦史草案は福島県立図書館に保管されている）。

司馬遼太郎は「暗い昭和」（戦前）に対し「明るい明治」と言ったそうだが、「暗い昭和」は「暗

い明治」を承継したものではなかろうか。明治政府は成立直後から富国強兵をスローガンとし、経済発展と軍事力強化に邁進し、1873年には徴兵令を發布した。75年には朝鮮の江華島に軍艦を派遣して挑発し、その結果翌年に一方的な日朝修好条規を押し付けた。そして94年の朝鮮王宮占領に至る一貫した軍国主義的内外政策をみれば、明治時代を到底「明るい明治」とは言えない。

歴代の戦後政府は、先の大戦について説明責任を果たしてこなかった。戦争を論じる基本姿勢が確立していないから「自虐史観」などという誤った意見が出てくる。「戦後」は終わったのかとの間に、北岡伸一氏は一言も戦争責任には触れず、「もう謝罪は要らない」という（4/22「朝日」）。彼の引用する戦後70年の安倍首相談話でも「誰が」、「何のため」、「何をしたか」と具体的に戦争責任を明示していない。これでは戦争被災者は誰も納得できまい。

今からでも遅くはない。政府は先の大戦と昭和の一連の戦争を日本国として検証し総括すべきである。議員立法で国会に独立の調査機関を設置してもいい。少数与党だから実現の可能性は高い。このままでは国民はまた戦争に狩り出され、果ては核戦争で日本は滅亡するかもしれない。戦争か平和かの分かれ道に立つ現在、主義主張にとらわれずみんなが手を取りあうときだと思う。

（よしだ つねとし）